



宝清寺

あけましておめでとう

御座います

今年(とし)は申(まを)年(とし)です。お釈迦様の言葉とされる「ダンマパダ」という經典に猿(いぬ)とた(と)え(え)に(に)使(つか)い(い)「ほ(ほ)しい(しい)ま(ま)ま(ま)の(の)ふ(ふ)る(る)ま(ま)い(い)を(を)す(す)る(る)人(ひと)に(に)は(は)愛(あい) 執(しつ)が(が)蔓(まん)草(そう) (つる)く(く)さ(さ)」の(の)よ(よ)う(う)に(に)は(は)び(び)こ(こ)る(る)。林(りん)の(の)中(ちゆう)で(で)猿(いぬ)が(が)果(くわ)実(じ)を(を)探(たづ)ね(ね)し(し)求(もと)め(め)る(る)よ(よ)う(う)に(に)「こ(こ)の(の)世(よ)か(か)ら(ら)か(か)の(の)世(よ)へ(へ)と(と) あ(あ)ち(ち)こ(こ)ち(ち)さ(さ)ま(ま)よ(よ)う(う)」と(と)述(た)べて(べ)い(い)ま(ま)す(す)。こ(こ)で(で)お(お)釈(しゃ)迦(か)様(やう)は(は)、戒(かい)を(を)守(まも)ら(ら)ず(ず)、や(や)り(り)た(た)い(い)ほ(ほ)う(う)だ(だ)い(い)自(じ)分(ぶん)勝(しょう)手(て)に(に)生(な)ま(ま)る(る)人(ひと)は(は)、永(えい)遠(えん)に(に)悟(ご)る(る)こ(こ)と(と)が(が)出(で)来(き)ま(ま)ず(ず)、た(た)だ(だ)輪(りん)廻(かい)転(てん)生(じやう)を(を)繰(くり)返(かへ)す(す)の(の)み(み)で(で)あ(あ)る(る)と(と)説(せつ)いて(いて)い(い)ま(ま)す(す)。他(た)の(の)經(きやう)典(てん)の(の)中(ちゆう)で(で)も(も)猿(いぬ)は(は)否(ひ)定(てい)的(てき)の(の)存(ぞん)在(ざい)と(と)し(し)ば(ば)し(し)ば(ば)登(とう)場(じやう)し(し)て(て)い(い)ま(ま)す(す)。

しかし、同じお釈迦様の「ミリンダ王の問い」という經典では「猿は棲を得るとき、しつかり枝が張り、静で安全な場所を選ぶ。仏道を修行する者は、猿の棲のように、すぐれた師のもとにすまなければならぬ。」と猿をほめています。何時の世も、同一のものについて「良い面」と、「悪い面」が混在し、輪転して現れます。今年こそ、「枝を見て、幹を見ず。」とならないよう。「悪い面」のみを誇張して捉えないよう。時代に流されない、しつかりとした発想を持つよう心掛けたいものです。現代人は特に、「不幸」には敏感ですが、「幸福」には鈍感になっているよう見受けられます。それは、現代の混乱した状況に対する「不安」のために「防衛の感覚」が身に付きすぎていられるのかもしれない。

先日ある雑誌を読んでいたところ、おもしろい話があった。

『おじいさんの四十九日の法事の時の事です。読経が終わって席を立ちかけた人達を坊さんが止めて、「美しい花・お供物・香りの良いお線香、ご縁の深かった人々が集まり、坊さんにお経をあげてもらい、立派に法事がつとまったとお思いですか、それでは法事は半分なのです。なぜなら、おじいさんからの宿題が残っているからです。」と語りかけ、続けて、「おじいさんは今から四十九日ほど前、おじいさんは身を持って、人間は必ず死ぬと言(こと)を(を)教(おし)えて(て)下(くだ)さ(さ)つ(つ)た(た)。そ(そ)し(し)て(て)、一(ひと)人(ひと)間(かん)は(は)必(かならず)ず(ず)死(し)ぬ(ぬ)ん(ん)だ(だ)ぞ(ぞ)、そ(そ)れ(れ)な(な)ら(ら)ば(ば)、息(いき)子(こ)よ(よ)・孫(まご)よ(よ)・縁(えん)の(の)あ(あ)つ(つ)た(た)人(ひと)達(たち)よ(よ)、あ(あ)な(な)た(た)達(たち)は(は)、そ(そ)の(の)日(ひ)に(に)必(かならず)ず(ず)死(し)ぬ(ぬ)ん(ん)だ(だ)ぞ(ぞ)。」

「お釈迦様の教え」4 「正しく見る目、見える目を」

お釈迦様の教えに「汝等比丘、善知識(正しい仏道に誘い導く人)を求むることとは、不安念(迷いのない心)に如く(まさるもの)は無し。」(正念覚)「汝等比丘、若し念(ものを考へたり思い描く心の働き)を撰むる者は心(心)則ち定(心を一つの対象に傾注して散乱させない精神作用)に在り。心定に在るが故に能く世間生滅(生ずることと滅すること)の法相(存在する諸法の真実の姿)を知る。」(正定覚)とあります。「より良く生きたい」「より幸福な生活を送りたい」とは誰でも望むことです。幸福な人とは、「満ち足りた心」「やすらぎの心」で日々を送ることが出来る人ではないでしょうか。やすらぎの心を養うには、善き導き手、頼りになる友人、先輩を得ることも大事なことでしよう。交友を保つには、常に清らかに、むさぼりや損得の感情を去り、純粋な気持ちで対する念が必要で、この心が「正念」と言われるものです。この「正念」を得るためには、いつでも心が安定した状態を保たなければなりません。これを「禅定」と言います。禅定といえ「坐禅」を思い浮かべることと思いますが、坐禅は安定した心に到達する一つの方法なのです。澄み切った濁りのないところに「真実の道理」が目覚めてくるのだと思います。

「くらしの中の仏教話」

「神通力」 仏教の説く六神通「並はずれた能力」、「信じがたい力」、を一般に神通力と呼んでいます。「神通力」という言葉は、本来は仏教語なのです。仏教の説く神通力は、次の六つです。

- ① 天眼通 - 普通見えないものを見ることができる。
- ② 天耳通 - 普通聞けないことを聞くことができる。
- ③ 天人通 - 他人の心を知る能力がそなわっている。
- ④ 宿命通 - 自分と他人の運命を知る通力がそなわっている。
- ⑤ 漏尽通 - 全ての煩惱に迷わされない通力がそなわっている。
- ⑥ 神足通 - 自由に身を変化させる通力がそなわっている。

最近、私たちは、精神が純化されるほど、ものごと集中する姿勢を忘れていくのではないかと思われます。我々でも、「精神が純化されるほど、対象に向き合い集中すること」で、「神通力」を身につけることができるかも知れません。

木建 尊の十方へお願い

墓地を求められて、更地のまま長い年月放置状態の方があります。本来墓地は寺が、永代に渡り墓地の使用を許可し、その墓地内は自分達で清掃管理すべきところですが、当山では、当山全体の墓地管理上、美観を損なわないよう、寺務員が草取りをする等のお手伝いを自発的に行っていきます。最近の不況の中でご不幸があり、葬儀・建墓が同時に起こり困らされている方もあります。そこで、未建墓の方へ、**今年、計画的な建墓を促して載せたいと考えておりますので、ご協力**のほどよろしくお願い致します。